

緊張のその先には…

空はどんよりとした分厚い雲に覆われている。雅治はいつになく緊張していた。

文化祭に向けての取組は、佳境を迎えている。中学校生活最後の文化祭ということで、今年も去年以上に力が入っていた。大道具係兼キャストの雅治は、ここまで大道具係として、舞台の背景作りを必死に行ってきた。イタリアの街並みを表現するために、細部にまでこだわって背景を描いてきた。どうしたら効率良く出し入れできるかを考えて、段ボールを使って支えるように工夫した。大道具係として「納得できる仕事をした」と鼻高々だった。

今日は二回目の舞台練習の日だ。当日と同じように劇を通し、演技や道具の出し入れを確認していく。しかし、雅治は緊張していた。手にはびっしょりと汗をかいていた。鼓動がどんどん速くなっていくのがわかる。「人前に立つのが苦手なのに、なぜキャストにも立候補してしまったのだろう…。」朝から自問自答していたが、今更どうしようもない。ここまできたらやるしかない。そんなことはわかっているが、足はガクガクと震えていた。

大道具の出し入れも無事終わり、いよいよキャストとしての自分の出番がやってきた。あまりの緊張に、目の前が真っ白になっていく。意を決して舞台袖を出ると、照明係の真剣な表情が見えた。舞台中央までいく、今度は監督の険しい表情が飛び込んできた。みんな必死だ。それぞれの場所で、最後の文化祭に向けて命をかけている。それなのに自分は、「人前に立つのが苦手だ」なんて考えている。みんなが真剣なのに、今更悩んでいる暇はない。仲

間と最高の劇を作るためには、もうやるしかないのだ。

自分の出番は一瞬だった。舞台上では、思っていた以上に冷静だった。キャストやそれぞれの係の動きが、驚くほどはっきり見えた。相変わらず、足はガクガクと震えている。心臓の鼓動もまだ速いままだ。全身は汗でびしょりになっている。いつもならベタベタして気持ち悪いと思う汗も、なぜか今日は心地よく感じた。そして、なんとも言えない達成感でいっぱいになっていた。

通し練習が終わり、監督の話が始まった。細かい部分で見直していかなければならないことはまだまだあったが、みんな笑顔で全力を出し切ったという顔をしている。そんな顔を見ながら雅治は感じていた。「当日も緊張するんだろうな。でも、きっと大丈夫。このクラスの仲間となら、最高の劇が作れるはずだ。」と。

空には、すがすがしい秋晴れが広がっていた。